

◆八木健 選 ～『生きているうち今のうち』②～

「ほりもとちか」の句集を読む。

戦中派皮透けるまでメロン食ふ

西瓜もそうだが、メロンは特に皮と果肉の境界線の引き方に世代が反映される。宴席で出されるメロンは、皮のついた状態で船型にカットされ、食べやすいように果肉に切れ目を入れてあるが、あれは気に食わん。まだ五ミリぐらい果肉が皮についている。もったいない。「皮透けるまで」は誇張だが、この誇張がいい。

朝顔の咲いた朝だけ水やる子

小学生の頃、一人一人に朝顔の鉢が渡され、夏休み中に朝顔の観察日記をつけるという宿題があった。校庭にも植えられていて、水やり当番というのがあった。雨の日も如雨露で水をやる子がいたというのを聞いたことがあるが、咲いた時しか水をもらえないとなると、朝顔も必死で咲いたろうね。

鷹舞ふや空は高さを失はず

「天高し」の句だね。鷹がどんなに高く舞おうとも、その上の空は比較にならぬほど高い。鷹が空の高さに挑戦したものの、天はびくともしないのだ。さあ、もっとここまでおいでと言われていている。空を擬人化して、面白さと奥深さが出た。

大根を煮てをり名句作りつつ

大根を煮るなどというのは平凡な日常だから、特別な句になりにくい。まして名句となると難しい。それなのに、「名句作りつつ」と断定しているのが面白い。

「大根煮る」の句は他にもある。「良妻で賢母で美人大根煮る」である。自身のことをおどけてそう言っているのか、あるいは息子さんのお嫁さんであろう。いずれにせよ、どちらの句も名句である。

おでん食ひとても上手な嘘をつく

この句の主人公、嘘をついたのは誰か。作者ではないだろう。作者だったら

「上手に」となるはずだ。だから、おでんを一緒に食べている誰かだが、嘘を作者に見抜かれている。こんな風にも詠めるのではないだろうか。「嘘ついた口でおでんを食べてゐる」。

#### 遺言のことなど話し河豚の鍋

家族だろうと友人だろうと、遺言の話ができるほどの人間関係はいいね。河豚には毒がある。当たって死ぬことはないだろうが、河豚鍋だったからこそ遺言の話に展開したのだろう。財産は残せないけど葬儀の費用ぐらひはなんとかつくってあるわ。銀行の通帳と印鑑のしまつてある場所は手帳に書いてあるからね。時計や貴金属類は押し入れの中の収納箱よ。まあ、一番値打ちのあるのは句集だけだね。

#### 猫の手にされてたまるか十二月

「猫の手も借りたい忙しさ」という表現が前提にある。ゆったりとお茶でも飲んでいようものなら、掃除、洗濯、買い物、片付け、孫の世話など、次々に用事が降りかかってくる。暇を持て余しているわけではないのに、「助かるわ」「有難いわ」などと言葉巧みに酷使せんとする。年末は特にご用心。「されてたまるか」である。

ここまで、『生きているうち今のうち』の一月から十二月までの各章の写真と俳句は、ちかさんのお人柄そのままに明るく、健康的な句がほとんどである。

ところが、それらを楽しく拝見した後、最終章の扉を読んで、心臓が止まりそうになった。「亡き子治平を詠む」となっていたからである。ちかさんは、長男の治平さんを平成十六年四月に癌で亡くされた。満四十歳だった。以後、四年間は俳句からも遠ざかっておられたのだそうである。

最終章に子を恋う三十七句が掲載されている。

年迎ふ逝きし子逝きしままにかな  
雛菊やいつも近くに亡き子ゐて  
野遊びや亡き子の分のお弁当  
逝きし子の花の忌日に少し泣く

母の日や亡き子の優しかりしこと  
逝きし子の面影へ打つ草矢かな  
形代に亡き子の名前まつ先に  
百日紅亡き子通ひし幼稚園  
吾子生きてをればをればと盆の月  
吾子の星流れ大きな闇残る  
きつと来る子はきつと来る門火焚く  
ハンサムでありし子の墓洗ひけり  
夜なべして服縫ひやりし子も逝けり  
逝きし子の泣きゐる夢を見て夜寒  
ねんねこに育てたる子も逝きにけり  
生きたくて生きたくて逝き冬銀河  
子の生まれ変はりの猫と年惜む

これまで二十年余り、先立った我が子を思う母心が率直に詠まれている。何気ない日常をさらりと詠んでいながら、とすべきか、さらりと詠んでいるがゆえに、とすべきか、どの句も胸に迫る。